

教師の部活動指導頻度により形成される教師観の違い —体育大学生を対象として—

荒井 龍弥¹⁾ 井上 雅勝¹⁾ 末永 精悦¹⁾ 胡 嘉聞²⁾
高 楠²⁾ 佐藤 悠大²⁾ 鈴木 佑弥²⁾ 高橋 賢人²⁾
玉浏 裕也²⁾ 冨澤 光生²⁾ 松本 宏二郎²⁾
岩山 良平²⁾ 北澤 航也²⁾ 鈴木 貴之²⁾

1) 仙台大学体育学部 2) 仙台大学大学院

研究資料

教師の部活動指導頻度により形成される教師観の違い —体育大学生を対象として—

荒井 龍弥¹⁾ 井上 雅勝¹⁾ 末永 精悦¹⁾ 胡 嘉聞²⁾ 高 楠²⁾ 佐藤 悠大²⁾
鈴木 佑弥²⁾ 高橋 賢人²⁾ 玉渕 裕也²⁾ 富澤 光生²⁾ 松本 宏二郎²⁾ 岩山 良平²⁾
北澤 航也²⁾ 鈴木 貴之²⁾

1) 仙台大学体育学部 2) 仙台大学大学院

T.Arai¹⁾, M.Inoue¹⁾, S.Suenaga¹⁾, K.Ko²⁾, N.Koh²⁾, Y.Sato²⁾, Y.Suzuki²⁾, K.Takahashi²⁾, Y.Tamabuchi²⁾, K.Tomizawa²⁾, K.Matsumoto²⁾, R.Iwayama²⁾, K.Kitazawa²⁾ and T.Suzuki²⁾ : Differences on Student's Particular Images of a Teacher characterized through frequencies of coaching on club activities : Bulletin of Sendai University, 51 (1) : 09-17, September, 2019.

1) Sendai University Faculty of Sports Science 2) Sendai University Graduate School

Abstract: In this study we investigated about images of teacher coach of school with university students when they were in club activities of junior high school or high school. Over 70% teachers participated almost every opportunity for training or matches. They were got higher score for questionnaire of good teacher by students than the less participated teachers, e.g) ability of communication with students, splendor as a human. From the students, who would be strongly engaged in club activities than a normal student, they have the more better image of the teacher who makes good relationship and have a good feeling, if the teachers participated to club activities more eagerly.

KEYWORD Club Activities in School, Teacher's Duties, Teacher Coach, Images of a Teacher

キーワード 部活動, 教師業務, 顧問, 教師観

I. 緒言

近年、学校や教師に対する多様な期待が教師の長時間勤務をもたらしめていることが問題視されており、各所で「学校における働き方改革」が注目・検討されている（例えば、文部科学省（2017））。

この中で、部活動の設置・運営は学校の法令上の義務ではないが、ほとんどの中学・高校で設置されており、多くの教師が顧問を担わざるを得ない実態となっていることを踏まえ、文部科学省(以下「文科省」と記す)は「学校の業務だが、必ずしも教師が担う必要のない業務」として位置づけ、

部活動指導員の導入を行うなど、いわば教師の業務軽減策の「目玉」としようとしている（文科省、前掲）。

確かに昨今、部活動に関する教師の負担を問題視した報告は数多い。例えば、中澤（2017）は、新学習指導要領によるこれからの運動部活動について主に部活動の持続可能性の観点から検討を行い、教師の負担問題の解決が部活動の持続可能性の改善につながると提言している。さらに、匿名の公立中学校校長（2018）は、運動系の部活動が盛んな中学校を対象として、主として労働環境の側面から教師の勤務実態について調査を

行った。この結果、休養日をほとんど設けていないこと、中学校体育連盟という制度がすべて教師で構成されているなどといった問題を基に、教師間の運動部に対する考え方のずれが生じていることを明らかにした。これらから超過勤務を生む部活動指導には、労働環境の改善という観点が必要であるとした。また、安藤(2018)も運動部活動指導者の心理的負担について検討を行い、指導者のこころの健康に向けた支援対策が必要という提言を行っている。

これらからも、教師の抱える負担の軽減は、部活動を筆頭として日本の学校が喫緊に解決すべき問題であるといえる。問題を根本的に解決すべく、部活動を置かないという試みを行う学校も現れてきている。

しかしながら、生徒から見た場合、部活動の持つ教育効果は無視できない。例えば日野(2010)は、中学校を対象に部活動に参加する生徒のライフスキルの獲得状況につき調査を行い、部活動は生徒のライフスキルを育む有効な場になると位置づけた。このために指導者のライフスキルに関する意図的な指導や積極的関与という観点から部活動の意義を再確認した。また、吉村(1997)は主将と部員の人間関係の視点から部活動と学校生活への適応感の関係について検討を行い、部員の自己表現、主張の特徴を中心に考察している。

一方、川口(2017)は、教職課程を履修する関西地区A大学文系学部生を対象に、部活動をとおして育成される社会的リテラシーと教育的意義について調査を行い、対人関係の構築やその能力、目標や活動への主体性、練習や準備・片付けを通じての学びといった社会的リテラシーの側面に部活動は効果があったと大学生が感じていることを示した。すなわち、部活動は社会的リテラシーの育成に資する教育活動であると主張している。

また、神谷(2015b)は、スポーツ庁の設置を契機とし、運動部活動が競技としての場なのか、はたまた、生涯スポーツとしての場であるのかという今まで曖昧とされてきた問題に明確な答えを出すことの必要性について再考している。部活動の教育目的を明確化しなければ教師の時間外勤務の問題への議論ができないという。また、過去の取り組みの反省に基づく対策へのビジョンをもって今後の対応を注意深く見る必要がある、としている。

あわせて神谷(2015a)は、従来の教師の専門性との関係が不明確な人格形成論に基づいた部活動指導を見直し、「トータルな自治」を指導することによる思想や行動の形成を目指すべく、指導構造を整理、解釈し、改善策を提言している。また、青柳(2017)は、コーチングにおいて主に子どもを育てる観点から検討を行い、コーチングマインドを持っていることを前提にコーチングスキルを活用して正しいコーチングプロセスを進めると子どもに恩恵があると提言している。

すなわち、負担となっている部活動を教師から引きはがすのではなく、新たな部活動との関わりを模索しようとするにより問題を解決しようとする考え方も存在するのである。

福岡教育連盟(2016)は教師にとって部活動指導はデメリットを超えるメリット、すなわち、例えば生徒の多面的理解が得られる、深いつながりができ、教師としての財産となる、感動がある、人間的成長を間近に見られる、教師自身の成長も期待できるなどといった点があるという。これらのメリットがあるからこそ、教師も時間的にも精神的にも重い負担を負うことを非としなかった部分があるというのである。

しかしながら、指導を受けた生徒側から見た場合、これらの「メリット」が本当にあったのか定かではない。そこで本研究では教師側からはいわば「成功例」とみなすことができる体育大生を対象に、教師に対し、上述のメリットに沿った教師観を感じられていたのか否かを実証的に検討することを目的とする。

Ⅱ.方法

上述のように、部活動に対して教師が果たしてきた役割は、単に当該競技のコーチングやマネジメントにとどまらない。一方で教師の担当する業務は多岐にわたっており、業務上の役割も異なる。もちろん、教師自身が感じる部活動の重要性や熱心さもまちまちであることが考えられる。これらから、部活動への取り組みは質量とも教師ごとに異なり、練習や試合に立ち会う頻度は違ってくるだろう。これらの結果、教師の取り組みによって部活動

での生徒が感じる教師との親密感に違いが生じることが考えられる。福岡県教育連盟(2016,前掲)のいうように多面的な理解が得られ,教師自身も成長するといった教師側のメリットがあるのであれば,熱心な教師ほどそのメリットを享受していることになる。本学のような体育系大学に進学した学生(部活動に熱心だった学生が多い)にとっては,教師側のメリットを生徒として実感できるのではなかろうか。さらにこれらから,部活動以外のより一般的な教師としての生徒の評価にもそれらの違いが影響する可能性がある。すなわち,学生が評価する一般的な教師像に部活動への取り組みが影響することが予想されるのである。

そこでここでは小柴ほか(2014)が作成した一般的な「理想の教師像」に関する質問紙を用い,本学学生が高校時代に指導を受けた教師について評定をしてもらうこととした。また,取り組み方としては「熱心さ」といった態度尺度ではなく,できるだけ客観的な指標となりうるよう,引率や同席の度合いといった指導頻度,および部活動の実績等について尋ねることとし,それらによる平均的な教師像の違いについて検討する。

福岡教育連盟(2016,前掲)の「メリット」を踏まえると,仮説として次のことが予想できる。すなわち, i) 教師の部活動に対する取り組み頻度には違いがあり, ii) 頻度の多い教師の評価は,本学のような体育系大学に進学した学生では,より高いものとなるだろう。

あわせて,教師以外の指導者を積極的に登用しようという現在にあって,部活動にかかわる教師以外の人々が暗黙裡に期待される役割についての示唆も得られるであろう。

1. 調査手続き

筆頭著者が行う本学「教育の心理」科目受講者に対し,同講義終了後に調査への協力を呼び掛け,同意を得た学生について調査を行った。この科目はいわゆる教職関連科目であり,選択科目ではあるが教職免許取得のためには単位が必須となる。履修者が多いため,学科・クラス別に週4回開講している。2018年度の履修者は2年次生を中心に,合計487名であった。

調査実施日は進度により2018年11月15日(木)

～28日(水)にわたった。調査にあたり,説明文ならびに質問項目が印刷されたA4用紙(両面・2頁)を一斉配布し,同じく配布したマークシート(無記名)を用いて一斉に回答を求めた。平均回答所要時間はおおむね10分程度であった。

2. 質問項目

末尾資料に示す。質問項目は大きく2つのパートに分けられ,第1パートは回答者の中・高校時代の部活動の経験・実績と顧問教師の関わりについて尋ねた。第2パートは,小柴ほか(2014,前掲)の理想の教師像に関する質問紙項目の一部を部活動にかかわる内容に翻案し,回答者から見た当該顧問の教師像について回想的に尋ねた。両パートとも,「あなたが中学・高校時代に経験した部活動のうち,一番心に残っている部活動とその顧問の教師について」答えるよう指示した。

Ⅲ. 結果

1. 回答者数と分析対象

調査当日の講義出席者は合計391名であった。このうち回答を得たのは248名(63.4%)であった。問い1で想起した部活動が文化部(3名)または学校外のスポーツクラブ(7名)だったり,「思い出せない」とした者(1名)をはじめ,裏面の質問項目に回答がないなど,半数以上の設問に回答がなかった者計22名については分析から外した。この結果分析対象とした回答は226名分となった。

2. 回答部活動について

回答をしてもらった部活動の部員数や戦績をTABLE1に示す。団体種目は個人種目の約2倍の回答が得られた。また,全国大会レベルを経験した者は個人・団体とも約三分の一と多くはなかった。このように,回答者はさまざまなレベル・規模での部活動に所属していたことがわかる。本研究は緒言末尾で述べたとおり,全国の部活動のランダムサンプリングを期したわけではないものの,ここで得た結果は特定の部活動や競技レベルに偏ったものではないと考えられる。

TABLE1 戦績・部員数・種目（個人・団体）の回答数

		部員数				計
		9名以下	10～19名	20～29名	30名以上	
個人種目	戦績					
	地区大会	0	2	0	1	3
	県大会	2	7	2	5	16
	ブロック大会	6	5	6	9	26
	全国大会	1	3	4	11	19
	全国ベスト8	1	2	3	0	6
	国際大会	0	0	0	1	1
	戦績なし	0	0	0	1	1
小計		10	19	15	28	72
団体種目	戦績					
	地区大会	2	5	0	2	9
	県大会	3	19	15	25	62
	ブロック大会	1	7	6	9	23
	全国大会	1	4	13	18	36
	全国ベスト8	0	2	1	12	15
	国際大会	1	1	0	1	3
	戦績なし	0	2	0	0	2
小計		8	40	35	67	150

3. 顧問教師の関わりについて

顧問教師の部活動への出席状況をTABLE2に示す。平日・休日問わず部活動にかかわっている教師がかなり多い。大会時には96%の教師が参加していると答えた。平日・休日・大会すべてに「ほとんど出ていた」と答えたのは166名（有効回答中の74%）であった。熱心に部活動にかかわっている教師が多いことがわかる。次いで多い出席パターンは平日は「半々くらい」だが、土日や試合には「ほとんど出ていた」パターンで、20名（同じく9%）であった。

TABLE2 顧問教師の部活出席状況

出席状況	平日・朝 人数・%	土日・休暇期間 人数・%	試合・大会等 人数・%
毎回ほとんど	177 79%	192 85%	214 96%
半々	34 15%	27 12%	8 4%
ほとんど出ず	13 6%	6 3%	2 1%

以下では練習等に「すべて」参加していた参加頻度の高い教師166名（以下、「高群」と呼ぶ）と、そこまで頻度が高くはない教師57名（同じく「非高群」と呼ぶ）に分けて検討することとする。

高群と非高群の人数について、種目（個人か団体か）や部員数、戦績等による違いをクロス集計により検討したところ、いずれも有意な連関は見られなかった。

4. 教師像について

ここで用いた「望ましい教師像」について、「6」（わからない）の回答を欠損値とみなし、項目ごとに回答平均を求め、福岡教育連盟(2016,前掲)が指摘するメリットごとに前述の高群・非高群の観点から差を検討した。

（1）部活動関連項目

教師像項目のうち、部活動に直接関連した項目の結果をTABLE3に示す。いずれも高群が有意に高い。練習や試合等に欠かさず出ていることは、教師の部活動への取り組みに関する生徒の評価に直接影響していることがわかる。

（2）生徒の多面的理解

教師像項目のうち、「生徒の多面的理解」に関連する項目の結果をTABLE4に示す。高群の教師は多面的な理解をしていると判断されていることがわかる。

（3）生徒とのつながり・感動

生徒自身とのつながりや感動に関する項目結果をTABLE5に示す。いずれの項目についても、高群の教師の評定が高い。

部活動指導頻度による教師観の違い

TABLE3 参加頻度による教師評定平均値の違い(部活動関連項目)

質問項目	高群	非高群	t	p
17. 魅力的な部活動を計画することができていた	3.99	3.20	4.21	***
19. 部活動の指導に全力で取り組んでいた	4.31	3.32	6.20	***
21. 部活動にかかわる信念を持っていた	4.27	3.25	5.85	***

* p<.05 ** p<.01 *** p<.001(以下同じ)

TABLE4 参加頻度による教師評定平均値の違い(生徒の多面的理解)

質問項目	高群	非高群	t	p
11. 教師はあなたの日々の変化に気づいた	3.84	3.05	4.26	***
25. 学業面以外から自分のことを見てくれた	4.00	3.33	3.67	***

TABLE5 参加頻度による教師評定平均値の違い(生徒とのつながり)

質問項目	高群	非高群	t	p
8. あなたとコミュニケーションをとることができた	4.08	3.45	3.16	**
22. あなたを含め、生徒の成長に喜びを感じていた	4.16	3.49	3.48	**
26. 卒業後も人間的なつながりができた	3.91	3.27	3.21	**
28. とともに活動に携わることができた	4.12	3.18	4.65	***
29. とともに感動を得ることができた	4.16	3.31	4.39	***
30. とともに同じ問題に取り組むことができた	4.06	3.18	4.68	***

(4) 他者とのつながり(連携)

同じくつながりでも、生徒以外の関係者との連携に関する項目をTABLE6に示す。高群の教師に対する評定はこれらの項目に対しても高い。

(5) 教師自身の成長

TABLE7は教師自身の成長に関わる項目である。高群の教師はここでも生徒の評定は高い。

(6) 教師の人間的姿勢

教師の人間的な姿勢や態度について尋ねた項目をTABLE8に示す。項目13「誰に対しても笑顔で明るく接していた」には有意な平均差は見られなかった。一方でそれ以外の項目については高群の評定が高かった。

TABLE6 参加頻度による教師評定平均値の違い(他者とのつながり)

質問項目	高群	非高群	t	p
9. あなたの保護者と連携できた	3.80	2.93	4.44	***
15. 他の教職員と協力することができていた	3.81	3.19	3.20	**
20. 他の指導者や関係者と積極的に意見交換していた	4.10	3.25	4.56	***
23. 地域の人々と連携することができていた	3.68	3.10	2.83	**

TABLE7 参加頻度による教師評定平均値の違い(教師自身の成長)

質問項目	高群	非高群	t	p
9. あなたの保護者と連携できた	3.80	2.93	4.44	***
15. 他の教職員と協力することができていた	3.81	3.19	3.20	**
20. 他の指導者や関係者と積極的に意見交換していた	4.10	3.25	4.56	***
23. 地域の人々と連携することができていた	3.68	3.10	2.83	**

TABLE8 参加頻度による教師評定平均値の違い(教師の人間的姿勢・態度)

質問項目	高群	非高群	t	p
12. 教師は礼儀正しかった	3.98	3.56	2.19	*
13. 誰に対しても笑顔で明るく接していた	3.71	3.48	1.20	n.s.
18. あなたを含め、生徒の人格を尊重していた	3.94	3.16	4.17	***
27. 他の教師よりも人間的に尊敬できた	4.04	3.20	4.46	***

(7) 指導

福岡教育連盟の指摘にはない部分だが、教師

の指導に関する項目についても、TABLE9に示すように、同様に高群の評定が高かった。

TABLE9 参加頻度による教師評定平均値の違い(指導)

質問項目	高群	非高群	t	p
14. わかりやすい指導をしていた	3.87	3.00	4.67	***
16. 部活動以外の学校のきまりをあなたにきちんと守らせた	4.19	3.60	2.98	**

IV. 考察

1. 教師の部活動参加頻度の違いについて

方法の仮説 i)「教師の部活動に対する取り組み頻度には違いがある」については実証されたものと考えられる。本調査で得られたのは、実に74%もの教師がほとんど欠かさず部活動に参加していたという結果であった。中学校学習指導要領(2018)の総則で述べられている通り、部活動は学校の教育課程外の生徒の自主的、自発的参加による活動であるため、顧問といえども教師はすべてに立ち会い、関与する義務はない。試合はもちろん、土日の練習時にも8割を超える教師が立ち会うという状況は、体育やスポーツを志す本学の学生にとっては理想的であったのかもしれない。

もちろん、回答にあたり印象に残る教師を選択させたことも大きな要因であろう。体育を学ぶ本学学生にとって、中学・高校時代に印象に残る教師は熱心にスポーツに取り組む教師を選択することは想像に難くない。したがって、ここで得られた結果がすべての顧問教師全体に当てはまるとはいえない。そのことをおいても、得られた結果は我々の予想をも大きく超え、部活動に対する教師の熱心さが社会問題化することも首肯できるものであった。

同時に教師の熱心さは、部活動のレベル、種目の個人・団体の違い、部員数によらないことも示された。

2. 教師の評定値について

仮説 ii) で示した通り、部活動の参加頻度が高い教師のほうがより高い評定を受けるだろうと予想はしていたものの、ほとんどの項目で有意な平均差が得られた。福岡教育連盟(2016,前掲)の指摘は、生徒から見た教師像にも当てはまると言え

よう。今回は一括で評定させたこともあり、回答時の部活動顧問の姿は部活動に参加・指導しているものが想起されているであろうから、部活動時以外の教師の姿を正確に映したものとは言い切れない。しかしながら熱心に部活動に参加する教師の姿は、生徒からみても、生徒自身や関連する人々とのつながり、教師自身の人間的成長や姿勢などで高い評価を得ており、高群の教師と生徒の間にはより強い信頼関係が構築されていたことがうかがえる。

この結果が得られた原因として、ハロー効果などの評定上のバイアスが影響していることも考えられる。すなわち、生徒が教師に対し、部活動でより多くの時間を共有することを最も期待しており、その通りにしてくれた教師については他の特性の評定もそれに引きずられて、優れていると評定するバイアスが働いたという可能性が考えられる。さらに教師側が意識せずとも生徒に対しそのような効果を期待することも考えられる。すなわち「欠かさず部活動に立ち会うことで自らの教師としての欠点も多少大目に見てくれるのではないか」といった教師側の打算があったとも言えなくもない。

しかしながら、項目13.「誰に対しても笑顔で明るく接していた」は、教師の参加頻度により差が見られなかった唯一の項目であった。この設問項目はむしろ教師の日ごろの印象により大きく左右される項目であろう。この項目にのみ部活動への参加頻度の多寡による違いが見られないという結果は、逆に学生が項目ごとにきちんと回想して評定を行っており、「熱心な良い教師」だから全部評定を高くするといった一律の判断をしていなかった、すなわち項目ごとの評定値の信頼性が一定程度あるということの裏付けと考えることができよう。

すなわち、高群の教師は部活に欠かさずつきあっ

たことにより、生徒側には親しみや好感が生まれ、さらにコミュニケーションの機会も多かったことから、より密な信頼関係が形成されたことが考えられる。このように生徒との密でかつ良好な人間関係が構築できるのであれば、教師は部活動に熱心に欠かさず参加しようとするのも頷ける。今回の結果では高群は指導面に関しても、信頼関係をもとに学校での指導全般がより円滑かつ効果的に行えていたことがうかがえた。

今回の調査では、教師が部活動の指導・参加に割いた時間ではなく、参加機会上の割合のみを尋ねているため、現在問題となっている「働き方改革」の議論に直接示唆を与えることはできない。しかし、ここで得られた結果への期待が教師の熱心な部活動参加のためのインセンティブになってきた可能性も捨てきれない。

本研究で確かめられたことは、通常の生徒よりも部活動に強く携わってきたであろう本学学生には部活動に熱心に関与している教師ほど、生徒との信頼関係が強く、また人間的にもより好感をもった教師像として映っているということである。このような生徒がいる限り、部活動とのかかわりをたやすくは手離さない教師も存在し続けるのではなかろうか。

注記

- 1) 本稿は2018年度仙台大学大学院講義「部活動指導論特講」内にて共同執筆された。Ⅰの部分は第2・第3著者が第4著者以降と検討し作成した。Ⅱ以降の部分は筆頭著者が第4著者以降とともに原案を作成し、調査・分析は筆頭著者が行った。
- 2) 本研究の実施は平成30年度仙台大学倫理審査会にて承認された（倫理審査会通知30-17）。

文献

安藤美華代(2018) 学校運動部活動指導者の心理的負担感と対処に関する検討。岡山大学教師教育開発センター紀要, 8別冊, 45-57

- 青柳健隆(2017) 子どもを育てるコーチングマインド。体育の科学, 2017.7, 476-480
- 福岡教育連盟(2016) <https://www.fenet.or.jp/opinion/id/99>
- 日野克博(2010) 中学校部活動における生徒のライフスキル獲得と生徒から見た指導者のライフスキル指導との関係。愛媛大学教育学部保健体育紀要, 7, 39-44
- 神谷拓(2015a) 運動部活動の教育学入門。体育科教育, 12, 40-43
- 神谷拓(2015b) 「運動部活動の教育学」入門-これからの運動部活動の見方考え方。体育科教育, 3, 52-56
- 川口厚(2017) 生徒指導の実践の場としての部活動の教育的意義 -社会的なリテラシー育成の視点からの検討-。桃山学院大学経済経営論集, 59, 4, 59-75
- 公立中学校長(2018) 管理職の視点からの労働環境改善: 教員の超過勤務を生む部活動指導を中心に。学校経営研究, 43, 30-39
- 小柴孝子・武田明典・村瀬公胤(2014) 中・高校生が求める理想の教師像-開発のために-。神田外語大学紀要, 26, 489-509
- 文部科学省(2017) 教師の勤務の実態と「学校における働き方改革」。文部科学白書, 24-31
- 文部科学省(2018) 中学校学習指導要領
- 中澤篤史(2017) 新学習指導要領の深読み-新学習指導要領でこれからの運動部活動はどう変わるか-。体育科教育, 6, 52-55
- 大場郁弥(2016) 望ましい教師像に及ばず部活動顧問の影響。仙台大学卒業論文
- 鳥取県教育委員会(2013) 中学校における部活動ガイドライン <http://www.city.tottori.lg.jp/www/contents/1364178753391/files/bukatu.pdf>
- 山根文男・古市裕一・木多功彦(2010) 理想の教師像についての調査研究(1) -大学生の考える理想の教師像。岡山大学実践総合センター紀要, 10, 63-70.
- 吉村斉(1997) 学校適応における部活動とその人間関係のあり方。教育心理学研究, 45, 3, 337-345

資料 調査に使用した質問紙

部活動に関するアンケート(2018.11)

このアンケートは、教師が部活動の指導を行うメリットとデメリットを検討するため、あなたが中学・高校時代に経験した部活動の顧問とあなたの関係についてお尋ねするものです。ご回答は統計的に処理され、あなた個人が同定されたり、あなた自身にご迷惑をかけるようなことはありません。回答へのご協力をお願いします。また、回答をしなくても単位認定に全く影響はありません。どうかありのままにお答えくださいますようお願いいたします。

仙台大学大学院 部活動指導論特講 履修者一同

代表 科目担当 荒井 龍弥

○ あなたが中学・高校時代に経験した部活動のうち、一番心に残っている部活動とその顧問の教師について、以下の問いにお答えください。

1. 思い出した部活動についてお尋ねします。運動部でしたか？文化部でしたか？当てはまるものにマークしてください。

[1] 運動部 [2] 文化部 [3] 学校外のスポーツクラブなど [4] 何もしていなかった・思い出せない

※ [3]と[4]に答えた方は、質問はこれで終わりとなります。

2. 所属していた部活動は、個人種目でしたか？団体種目でしたか？当てはまるものにマークしてください。

[1] 個人種目 [2] 団体種目（ダブルスなども含む）

3. 部員数は全体でどのくらいでしたか？

[1] 9人以下 [2] 10～19名以下 [3] 20～29名以下 [4] 30名以上

4. 部活動、もしくはあなた自身の戦績はどの程度でしたか？

[1] 地区大会出場 [2] 県大会出場 [3] ブロック大会（地方大会）出場

[4] 全国大会出場 [5] 全国ベスト8以上 [6] 国際大会出場 [7] 戦績はなし

○顧問教師の部活動の関わりについてうかがいます。（教師以外の外部指導者は含みません）

5. その先生は、平日の放課後や朝の練習にはどの程度出てきましたか？

[1] 毎回ほとんど出ていた [2] 半々くらい [3] ほとんど出てこなかった

6. その先生は、土日や休暇期間中等、休日の練習はどの程度出てきましたか？

[1] 毎回ほとんど出ていた [2] 半々くらい [3] ほとんど出てこなかった

7. その先生は、公式試合や大会にはどの程度出てきましたか？

[1] 毎回ほとんど出ていた [2] 半々くらい [3] ほとんど出てこなかった

部活動指導頻度による教師観の違い

○ 5～7で答えた顧問教師が**部活動で**あなたと関わった際の状況についてお答えください。回答は以下の要領でマークしてください。

[1] 全くそうではなかった [2] あまりそうではなかった [3] ややそうだった
[4] かなりその通りだった [5] 全くその通りだった [6] わからない

8. あなたとコミュニケーションをとることができた
9. あなたの保護者と連携できた
10. 教師自ら学ぶ意欲を持っていることが感じられた
11. 教師はあなたの日々の変化に気づいた
12. 教師は礼儀正しかった
13. 誰に対しても笑顔で明るく接していた
14. わかりやすい指導をしていた
15. 他の教職員と協力することができていた
16. 部活動以外の学校のきまりをあなたにきちんと守らせた
17. 魅力的な部活動を計画することができていた
18. あなたを含め、生徒の人格を尊重していた
19. 部活動の指導に全力で取り組んでいた
20. 他の指導者や関係者と積極的に意見交換していた
21. 部活動にかかわる信念を持っていた
22. あなたを含め、生徒の成長に喜びを感じていた
23. 地域の人々と連携することができていた
24. 豊かな教養を備えていた
25. 学業面以外から自分のことを見てくれた
26. 卒業後も人間的なつながりができた
27. 他の教師よりも人間的に尊敬できた
28. とともに活動に携わることができた
29. とともに感動を得ることができた
30. とともに同じ問題に取り組むことができた

質問は以上です。ご協力ありがとうございました。

(2019年 5月31日受付)
(2019年 7月31日受理)